

平成 29 年第 414 回信濃町議会定例会 12 月会議 会議録(2 日目)

(平成 29 年 12 月 7 日 午後 2 時 30 分)

●議長 (小林幸雄) 会議を再開いたします。一般質問を続けます。

通告の 8 湊喜一議員。

- 1 通学路の安全対策について
- 2 小中学校におけるプログラミング必修化について
- 3 自殺予防について

議席番号 10 番・湊喜一議員。

◆10 番 (湊 喜一) 議席番号 10 番・湊喜一です。通告に従いまして質問をさせていただきます。

まず最初に、通学路の安全対策であります。質問は短くしたいと思いますので。

通学路と言いましても、夏の通学路、信濃町の夏の通学路と冬の通学路、これの安全対策というのは、まるで違うと、私は認識しているのですけれども、これは認識は共通していると思います。さて、この雪の降る季節がやってまいりまして、教育委員会そしてまた学校、それから地域公共交通協議会ですか、各団体の冬の通学路の安全対策というのは万全なんでしょうか。その辺のところ、まずお聞きしたいと思います。

●議長 (小林幸雄) 横川町長。

■町長 (横川正知) 湊議員さんにお答えをさせていただきます。いよいよ冬シーズンを迎えて、特にこの冬の降雪期における通学等々の安全対策についての御質問でございます。

3 年前に本当に残念な児童の下校時の事故があったわけでございます。その事故以来、学校では毎月の安全の日の取組、そしてまた行政としましても、道路管理者、交通管理者それから学校関係者の関係機関が集まりまして通学路安全推進会議を設置しまして、夏と冬の年 2 回、通学路の合同点検を実施しまして、危険回避の対策を講じているところでございます。それぞれの状況が変化する中で、子供たちも含め、住民の皆さんの安心安全のために、万全を期していかなければいけないということでございます。よろしくどうぞ、お願いします。

●議長 (小林幸雄) 湊議員。

◆10 番 (湊 喜一) はい。万全であろうとされているのは分かるのですが、なかなか万全というのは、難しい部分があると思われま。私、今回どういう目線で、交通安全、

通学路の安全の対策を講じていけば良いのかという部分で、子供の目線で、そういう安全対策を講じる必要があるんじゃないかなと思ひまして、以前、松木町政下で行われた子ども模擬議会ですね、あの席上で、子供たちが通学路の安全ということで、議題として一般質問していたことがあったんですよ。やはり、私たちが考えている通学路の安全と、子供たちが、常に通っているその通学路、バス通学にしてもそうです、徒歩通学にしてもそうだと思います。子供の目線、小中学生の目線での交通安全対策というのが、本来の安全対策ではないかなと思ひます。

児童生徒に対して、通学時にヒヤッとしたこと、とか、ハッと思つたようなこと、そういうアンケート調査というんですかね、そういう調査する必要あるんじゃないかなと。

そして更に自主性ですね、子供たちに自主性を持たせるには、この生徒会主導でそういうアンケート調査をすると、いろいろな問題点が出てくるのではないかなと、その辺のところも勘案して、交通安全協議会ですか、その辺のところの協議を更に深めていく必要があるんじゃないかなと思ひますけれども、これも町長と教育長に聞いておきたい。教育長ですかね、お聞きしたいと思ひます。

●議長（小林幸雄） 竹内教育長。

■教育長（竹内康則） 子供の目線に立つた点検、こういうことだろうと思ひますけれども、今、児童生徒会では、通学グループごとに、自分たちで歩いて感じた点、あるいは議員さん御指摘の、ちょっと危ないなと思つたような点、これを居住区ごとに地図に落とし込んで、それを全体場で、危険箇所マップ作りと称して、そういう取組が、ここ数年来続いております。そういう危険箇所マップを、学校全体として、先生方も含めて共有して、先ほど長の方からお話がありました通学路安全推進会議等の場におきまして、道路管理者、さらには私どもも含めて、周辺の大人が子供たちの目線を意識して、そして、私どもの取組をより実効性のある取組にすると、ここを昨今続けておきまして、そういう意味でも、ヒヤリ、ハッと、という、そういうことではないんですけれども、子供目線に立つた取組ということで、例年行っておりますので、そんな場面から子供たち自身が、自分の命というものを見つめ直す、そんな活動に通じているのではないかなというふうに考えております。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） はい。そういうことは実施されているということなんだろうが、そういうことで、そこで改善されたような、具体的な例というのはあるんでしょうか。お聞きしておきます。

●議長（小林幸雄） 佐藤教育次長。

平成 29 年第 414 回信濃町議会定例会 12 月会議 会議録(2 日目)

■教育次長（佐藤巳希夫） はい。この指摘の中でということではないかもしれませんが、学校から古間の商店街の方に向かって下りて行く道があるんですが、そのT字路になる部分に、ミラーが欲しいというようなことがありまして、そのようなことが改善されている部分の一つかと思います。はい、以上です。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） その所は知っているんですけど、それは実は昔、子ども議会で出た箇所であります。そこはその時に町長が、それは危険であるという認識で、そういう、改良するという答弁を、確かしておりました、その部分だと思われます。その子供の意見というのは、極力実現するというをやっていたんですけども、更にそういう、精力的に子供たちが、自分たちが危ないと思う危険箇所、これを大人たちが、特に行政が少しでも改良している姿勢を見せない限り、なかなか次から子供、そういう児童生徒たちの意見というのは、出て来づらい、「言ったって一緒だ」と思われがちです。その辺のところ、精力的に取り組んでいただきたいんですが、いかがでしょう。

●議長（小林幸雄） 竹内教育長。

■教育長（竹内康則） 先ほども話のあります、年2回の通学路安全推進会議の場で、道路管理者、それから交通管理者、それから学校、私ども含めて、議員の御指摘の趣旨を最大限生かしていきたいというふうに思っております。ただ、とりわけ交通管理者の立場に立ちますと、全体のことを、やはり大局的な見地から判断する、こういうこともございまして、毎年同じことを要請行動を行っていても、若干時間がかかる、そういうこともあります。例えば交差点ですとか、信号機ですとか、速度規制ですとか、ありまして、即ということではないんですけども、繰り返し粘り強く、働きかけをしていきたいというふうに思います。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） はい、できる限りというか、全力を尽くして、実現に向かって講じていていただきたいと思います。

それからあと、バス通学に関してなんですけど、バス停があるんですけど、雪が積もってしまって、バス停の位置に、待避する場所がないようなバス停がたくさんある。車が通ってしまえば、どこへ、車が滑ってきたような場合は、待避するような場所もないようなバス停が見受けられます。以前もそういう所を指摘させていただいたこともあるんですけど、保護者が、その待避場所を、自分の子供たちのために待避場所をスコップで作って、一人二人待避できるようなことを、やっていることを再三見受けております。これも保護者の、かなりの負担になっていると思うんですけども、その辺の負担軽減とい

平成 29 年第 414 回信濃町議会定例会 12 月会議 会議録(2 日目)

うんですかね、保護者の、その辺のところの対策というのは考えておられるのかどうか。これも教育委員会もそうでしょうし、公共交通の部分でもあるようにも思うんですが、その辺のところの考えをお聞きしたいと思います。

●議長（小林幸雄） 佐藤教育次長。

■教育次長（佐藤巳希夫） はい。バス停であるとか、歩みにくい部分について、保護者の方にも御協力いただく中で、通学の安全を図っていただいているところなんですけど、今後もそのような形で御協力いただけるように、またお願いをしてまいりたいというふうに思います。

●議長（小林幸雄） 和田副町長。

■副町長（和田勇人） 公共交通の関係の中での、バス停で子供たちが立っているスペースが確保できないというお話ですけれども、バス停の位置につきましては、協議会の方で、業者等も検討する中、また、地元の要望等で、できるだけ広い場所が確保できる所へ設置をさせていただいております。そんな中で、当然、降雪時については、管理そのものをしていただくという形になっていまして、自主的にそのスペースを空けていただいているというのが、現実であります。ただ、非常に危険な場所については、地元との協議の中で、より安全な場所に設置することは可能ですので、その辺も含めて、今後また協議会等の中で検討させていただきたいと思います。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） はい。今、副町長がお答えになったような場所、私も数か所指摘させていただいて、現実に、移動、バス停の移動をお願いして、それを実現していただいた所もあります。今、もう一か所、ちょっと危険な箇所もありますので、そのバス停の移動というのも働きかけている最中ですが、なかなか動かない、国の方の申請があるということで、簡単には動かせないというのは、私も認識しております。しかし、やはり子供の安全ということを考えれば、これは精力的に動いていただきたいなと思いますので、なるべく早く対応していただきたいと思います。

それと、これは町長と副町長、お二人にお聞きしたいんですけど、バス停に、保護者がスコップを担いで子供を見送りに来ている。その光景を見て、想像していただいて、ほほえましいと取るか、雪国での生活、雪国での生活は大変だなあと子供が感じていると見るか、どちらでしょう。ほほえましいと思っているか、大変だなあと感じているか、どういうふうに見られますか。

●議長（小林幸雄） 横川町長。

■町長（横川正知） 今言われた、両方だと思います。

●議長（小林幸雄） 竹内教育長。

■教育長（竹内康則） 私も両方だというふうに思います。両面あるんじゃないかと思
います。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） さて、困ったな、両面あるというのは。

結局、雪国での生活は大変だなというのは、やはり子供に対するマイナスの教育だと思
うんですね。子供は自分が親になったときに、自分の子供たちのために、バス停の
所で大汗をかいて待避所を作っている。これは黙ってやっている教育になるような気も
するんですね。私自身は雪に憧れて来た人間ですので、そういう姿は子供には見せない
ようにはしていましたけれども、やはり、保護者の負担軽減というのは、バス停におけ
るね、一番身近な協力者なんでしょうけれども、その辺のところの負担軽減というのは、
何らかの方法で考えていく必要があると思います。子供の教育上、子供が将来このまま信
濃町に住み続けられるような、そういう教育をする必要があるんじゃないかなと思うん
ですけれども、いかがでしょう。

●議長（小林幸雄） 横川町長。

■町長（横川正知） 湊議員さん、私も雪国で、しかも最も雪の多い所に住んでいる人間
であります。あまり昔のことを言うと大変失礼なんですが、当時私も小さい頃は、それ
こそ、かんじきで雪踏みをして、私どもの親が全部当番で、数百メートル、まあ1キロ
ぐらいのですね、雪踏みをして、子供たちあるいはその地域の道路確保と言いますか、
交通の確保をしていたと。これは私、逆に言えば、子供心で、その大人のそういった行
動、親に対して、ありがたいなあという思いを持っていましたね。と同時に、尊敬の念
といいますか、やっぱり大人は大したものだということだと思っていただけです。私は決
して、今の時代ですから、そのことを当てはめようというわけではないんですが、今、
湊議員さんが言われている分野については、ある程度そのことで、例えばその雪国が大
変だからという、子供たちが体にしみこんで町外へ行くとか、そういうことにはならな
いんだろうと思うんです。むしろやっぱり雪国の生活を体験するには、こういうことも
あるんだという、実体感として覚えていくということも、この地域の中で生活する知恵
だと思うんですね。えらいみんなその、ただただ、という言い方は悪いですが、何でも
かんでも便利が良くなった、それは良いのかもしれないのですが、やっぱりお互いに一
定のレベルで、それぞれ地域の中で生活をしているんだという実感を持ってもらえる、

平成 29 年第 414 回信濃町議会定例会 12 月会議 会議録(2 日目)

子供にも、そのことが大事なんじゃないかなという、どっちが良いとかという話は私はしませんけれども。はい。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） はい、確かに両面あるという部分はあります。子供たちに是非とも、親が「雪が大変だ、大変だ」と言わないように努めましょうというのが、私の今までの提案ですので、是非とも雪は大変だというのを、子供に聞かせないようにしよう。親は苦勞している、お前たちのために苦勞しているだぞというのは見せる必要はあるんでしょうけれども、「雪は大変だ、大変だ」というのを言わないようにしようというのが、私の持論であります。

ということで、続きまして、二点目の、小学校におけるプログラミングの必修化。ちょっとやっぱり言いにくいんですね、「プログラミング」というのね、舌を嚙（か）みそうなんです、必修、小学校の教育に必修化されたわけですよ。

今、インターネットの単なる普及に止まらず、インターネットを活用した I O T の活用分野拡大、最近テレビでもコマーシャルしておりますが、自動車の自動運転も可能にする A I という人工知能、その開発、近年におけるこの I T 技術の発展は、本当に著しくて、第 4 次産業革命とも言われる一つの大きな転換点だと思います。

こういう新しいニーズに対応し得る人材の確保は、世界的に共通のものとなって、我が国でもグローバルに活躍し得る人材を育成する上で、I T スキルの向上は不可欠だということで、2016 年に経済産業省が発表した資料によりますと、2015 年時点で、I T 人材不足数は約 17 万 1000 人。2030 年には、最大で約 79 万人のプログラミング、プログラマーですね、プログラマーが不足されるだろうと予想しております。

これで、こういうことを受けて、小学校でもプログラミングの必修化ということになったんだと思うんですが、今の子供たちは家庭の中で、一般家庭の中の I T 機器というのは非常に普及しておりまして、幼少期より、そういう機器に接することが珍しくない中で、この必修化になると、それに対応する教員が必要で、特に教員に求められる技能は自（おの）ずからレベルの高いものを要求されるわけでありまして、このごろ教職員というのは、非常に多忙で、いつまでも残業されているということも耳にしますし、目にも見ますので、そういう、スキルアップではなくて、必修化されたプログラミングを外部人材で賄う必要があるんじゃないかなと思っております。

この必修化に向けて、既に考えておられると思いますが、この教育委員会の対応をお聞きしておきたいと思っております。

●議長（小林幸雄） 佐藤教育次長。

■教育次長（佐藤巳希夫） はい。まず本年度の取組状況なんですが、総務省のクラウド・

地域人材利用型プログラミング教育実施モデル実証事業というものを活用いたしまして、信濃小中学校が実証校となりまして、実施をしたところです。

この事業は、未来工作ゼミ・プログラミング講座というもので、民間の I T 企業が企画運営をいたしまして、アプリ開発の、子供たちの指導を長野高専の学生さんが担当して実施しました。今回は子供さん向けのアプリを使い、課題に対してその課題を解決するためのアプリ開発を行いました。講座の最後には信州未来アプリコンテストというのがございまして、そこに出場いたしまして、「図書館が暑いからどうにかしたい」という課題解決のために開発したアプリが、12 月 9 日、今週末ですが、開催されます、起業家甲子園万博の北信越大会を兼ねた本選への出場を決定しているところです。このようなことが、今現在取り組んでいるところでございます。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） それは私も勉強不足で、そういうことが行われているということは全然知りませんでした。実際やっておられるということを知って、多少そういう先取りというのを、しっかりされているという評価をさせていただきます。

各地で、全国各地で、千葉県の柏市というところで、今言われた同じようなことがされている。これで子供が作って、実際に物が動いていくということを体験して、子供たちが興味を持っていく、また、今テレビでも良く出てきます人型ロボット、胸にモニターを持って、自走しておじぎをして握手もできるようなロボット、それを導入して、それを動かす、また会話する、そういう開発、そのプログラミングを開発するような教育をやっている。これは愛知県の一宮市、それと静岡県の藤枝市、特にこの藤枝市は、各校にこのロボットを配置して、多い所は 2 台も 3 台も一つの学校に入れて、そのロボットを行政の窓口において、案内、案内嬢というのかな、そういうことをさせているということが、公明新聞ですが、載っておりました。

こういう、非常にお金がかかっているなどは思いますけれども、子供たちの興味を引く教育としては、これはかなりの投資、思い切った投資だと思うんですけども、信濃町もそのアプリのコンテストですか、そこそこの成績を残しているということは、これはすばらしいことだとは思いますが、そういう財政的な部分というのは大丈夫なのかどうか、その辺のところも合わせて、今後の取組ですね、お聞きしたいと思います。

●議長（小林幸雄） 佐藤教育次長。

■教育次長（佐藤巳希夫） はい。平成 32 年度から学習指導要領が変わりまして、小学校で必修になるということです。現在、学校の方にはタブレットが 90 台、パソコンが 20 台、それから公務用のパソコンが、先生に 1 台、1 人 1 台ずつというような配置がされています。I T 機器も、大体、賞味期限が 5 年から 6 年というようなこと言われておまして、先日、実は上水内の教育委員会の協議会というところで、先進地と言います

平成 29 年第 414 回信濃町議会定例会 12 月会議 会議録(2 日目)

か、青木小学校の方に視察をしてまいりました。その場でも、大体5年か6年に一度は機械の入替えが必要になりますというようなお話を伺ってきたところです。まだ、今のところそういう先進地の学校を見たりしている段階で、ちょっとまだ財政的なものの試算であるとか、そこまでは行っていないというのが実情です。はい、以上です。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10番（湊 喜一） はい。それでは、これを町長にも振っておく必要が。財政的な支援というのは、これは私も今お話を聞いて、タブレット90で、パソコンが20台、確かに小中学校、職員室の向かい側にパソコンルームがあって、これだけでは本当に、なかなか足りないだろうなという印象を受けました。あれの拡充というのは必要だと思いますし、今もうパソコンというのは日進月歩で、1年経てば形が変わってしまって、性能も格段に変わってしまっています。本当にその、賞味期限という言葉がされていましたけれども、本当にその能力というのは、それこそ賞味期限だと思います。あつという間に変わっていく。そういう意味でも、財政的な支援というのは不可欠だと思います。

是非ともこのパソコンルームの拡充、将来に向けて子供たちの仕事の選択ですかね、そういうものを大きく広げる可能性のあるIT関連の教育というのを、是非進めていくという、そういう投資、今後されていきたいと思っているんですけども、その辺のところの、長の考え方、認識をお聞きしておきます。

●議長（小林幸雄） 横川町長。

■町長（横川正知） 今、湊議員さんからも今後も含めてということであります。今やっぱり学校、義務教育といいますか、小中学校におけるそのプログラミング必修化ということでもあります。

実はそういう流れを受けて、県の町村会で、私もちょうど今、総務部文教部会というところに属させていただいているのですが、やっぱりその指導体制と、そしてやっぱりそういった後の財政も含めて、それから地域的な偏在がないようにということで、それぞれ指導体制も含めての要望を、是非しっかりこの辺を踏まえて、対応をお願いしたいということで、県、そしてまた国の方に要望書として上げている段階でございます。町だけで、そのことを対応できるという状態じゃないだろうというふうに思いますので、できる分野については、町は当然やりますけれども、全体としての流れが、そういう流れにあるということも、また承知いただければというふうに思います。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10番（湊 喜一） はい。確かにこれは、一つの町でできる範疇を超えている部分は多々あると、私も感じております。これは県、国の財政的な支援、それから人材的な支

援も必要だと、私も考えております。是非ともそういうところに、今後意見も上げていきたいと思っております。

それと、その部分でもう一点、人材、先ほど高専の学生さんたちという話をされておりましたけれども、そういうところは、将来的にずっとそういう形で支援をしていただけるのかどうか。そういう人たち以外にも、信濃町には I T 関連のプログラムを売っているような業者さんがありますからね、そういう所の人材も、外部講師というんですか、外部の人材として導入される、そういうことを考えておられるのかどうか、お聞きしておきます。

●議長（小林幸雄） 佐藤教育次長。

■教育次長（佐藤巳希夫） はい。先ほどの民間の I T 企業、それから指導者として長野高専の学生さんがというお話ですが、こちらの事業につきましては国の補助事業で、県から、県下で数校手を挙げて、その中の学校が該当になったという事業で、とりあえずのところ、本年度のみというような予定をしているところです。

また、外部人材の活用というようなお話ですが、今、学校の先生方も、働き方改革であるとか、超勤時間の問題であるとか、いろいろなことが言われている中で、例えば部活については外部から講師を招いてやっていきたいというような大きな方向性なども、今出ているところです。そのような中で、御協力いただけるような方々があれば、そういうものも考えながら、導入していくというのも大事な事かというふうに思っているところでございます。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） 続いて踏み込もうかなと思っていた部分なんですけれども、是非ともこの部活化、学校の中でもパソコン部みたいな、そういう部活にする必要があるんじゃないかなと思っております。それも、教師が指導するのではなくて、外部の方たちを導入して、そういう部活の、コーチではないですね、教えていただくということは、必要じゃないかなと思っているんですけれども、部活化というのは、今何となく学校を見ていると、スポーツにしても、文化系にしても、部の活動が非常に少ないような印象を受けるんですけれども、今後そういう教育委員会からの働き掛けで、そういう放課後のその活動というんですか、そういうことが活性化していくのかどうか、ちょっとお聞きしておきたいと思えます。

●議長（小林幸雄） 竹内教育長。

■教育長（竹内康則） 今、直接的に話題になっておりますのは、先生方は非常に、土日を含めて、部活の顧問という立場での超過勤務時間数が多い、これがデータ上はっきり

しているわけです。したがって、県の教育委員会としましては、国も今年初めて顧問をできる外部指導者という立場で、つまり市町村の臨時職員という立場での外部講師の活用策というものを、今年度初めて概算要求で、今揉（も）んでいるところであります。そういう国の中身がはっきりして通ってくれば、県市町村含めて、手を挙げると。先般も当学校における意向調査がございましたが、是非とも我が町については、手を挙げてそういう方々を置きたいと、こういう立場を、県教委の方を通して、国へ働きかけをしておりますけれども、結果が出ておりませんので何とも言えないのですけれども、できる限りそういう財政的な、少しでもそういう支援・補助があれば、そういう仕掛け、仕組みに乗って、私どもとすれば学校を応援していく、そういう考え方ではありますので、よろしくお願ひしたいというふうに思います。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） はい。実は私も先日、校長先生、副校長先生とお話をした時に、「放送部を是非作って」と、外部講師で私が入ります、というような話もしていたんですけれどもね。是非ともそういうような部活、外部の人材を使っただけならば、教師の方の負担も若干減るんじゃないかなと思いますので、そういうところ、国の動きも大事でしょうけれども、その辺のところ、受皿をしっかりと作っておいていただきたいなと思って、この部分は終わりたいと思います。

続きまして、自殺予防について。

毎年9月の10日から16日の自殺予防週間というのがありまして、自殺に対する誤った認識や偏見を払拭して、理解の促進を図ることを目的として、こういう自殺予防週間というのが設けられております。今年の7月25日に閣議決定をされた新たな自殺対策の指針で、自殺総合対策大綱では、過労や生活困窮やいじめ、そういう、生きることの阻害要因を減らし、自己肯定感や信頼関係といった、生きることの促進要因を増やすことを通じて、誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指しているという、そういう自殺総合対策大綱というのが、今年できております。

これ（湊議員手持ち資料）は、実は阿部守一長野県知事に出した要望、提言書で、公明党の長野県の青年部が作った提言書であります。この中は、もうグラフばかりです。この中で、自殺というものの認識が皆さん非常に希薄であるという、自殺は特に若い人たち、今20代30代の死亡の第一原因というんですか、第一位は実は自殺、交通事故ではなくて自殺が、死亡原因の第一位ということ、皆さん御存じかどうか、という。非常に若い人たちの間で亡くなってしまうという、しかもこういう若い人たちが、4人に1人が、本気で自殺したいと考えたことがあるという人が、やはり大分いるという。4人に1人が本気で自殺をしたいと考えたことがあると、25パーセントですよ。非常にこういうことを、いとも簡単に自殺ということを考えてしまっているという、こういう御時世でございます。

そういうところを、どうしてやっていったら良いかという、どうして防いでいこうかと、以前もこういう問題を、いじめからこういう自殺に、学校の問題でね。信濃町はゲートキーパーを養成していくという。普通の方に「ゲートキーパーとは何ぞや」ということをこの中でもアンケート調査しているんですけども、「ゲートキーパーというのは何か分からない」と答えている人がほとんどであると。そういうところで、信濃町はゲートキーパー養成をやっていくという、以前に答弁もありました。

そういうところから、今後信濃町は、国の方が自殺総合対策大綱というものを作って、今後こういう形で自殺を予防していこうとしております。信濃町はどのような対策を、今後していられるのか、とりあえずその一点をお聞きします。

●議長（小林幸雄） 横川町長。

■町長（横川正知） はい。自殺対策ということで、これは極めて大きな社会問題だなということを前々から私も思っております。今、湊議員さんが言われた、特に若い皆さん方も、それこそ4人に1人、そう思ったことがあるというようなことで、大変重要な課題だなというふうにも思っているのですが、過去に数字的に見ますと、平成15年、これが厚労省の作成データなんですけど、平成15年、全国では3万4427人、そしてこの平成28年に2万1897人ということで、22年ぶりに2万2000人を下回ったというようなことでございます。しかし、その前といたしますか、平成10年から14年連続で3万人を超えているというような状況もあったわけではありますが、昨今男性では7年連続で減少傾向、そしてまた女性が5年連続で減少傾向にある、こういうことのようにございます。ただ男女比で見ますと、女性より男性の方が人数的に2.2倍というようなことも、統計上は出ているということでございます。

今、町としての対応、対策の関係でございますが、通常の中では、先ほど言いましたように、できるだけ気付いて、その身近で相談も含めて対応できるかどうかというような、ゲートキーパーというようなことも話がございました。細かな事については、また担当の方から、もし必要でしたらお答えをさせていただきますけれども、平成28年に自殺対策基本法が改正になったわけでございます。そういうことで、これに基づいて、計画、自殺対策計画といたしますか、これを作れということが義務付けられたというふうに、各自治体で。これで長野県の県自体が今年度策定して、そして来年度中には全市町村がその計画を策定するんだと、こういうような方向性になっているようでございます。したがって、その辺も含めて、実効性のあるといたしますか、そういった計画を作っていくのが、今求められているのかなというふうに思います。具体的な、今における対応について、もし必要でしたら担当課長から申し上げます。

●議長（小林幸雄） 高橋住民福祉課長。

■住民福祉課長（高橋 徹） 自殺対策計画につきましては、今年度作成しています県の

計画を基といたしまして、信濃町の計画を来年度作っていききたい思います。具体的に、こういったことを盛り込むというのは、ちょっと今のところはないのですけれども、なるべく即した計画を作っていききたいと思っております。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） はい。是非とも良い対策を講じていただきたいと思うんですが、実はこの若者の自殺対策に関する提言書、これ知事に提出した新聞記事を読んで、LINE（ライン）社って御存じですかね。今、若者だけではなく、無料通話で、LINE 社って、今は大手の通信会社になってしまいましたけれども、LINE でメッセージを送って無料の通話もでき、そういう会社、ここの社長が、その新聞記事に目を留めて、長野県知事の方へ申入れをして、LINE 社が、この LINE の中に、SOS の発信、もう自分は自殺をしたいと思っているような子供たちに、相談窓口を LINE 社が開いた。それで相談に乗るといふ。それまで長野県がこの相談窓口にしてきた件数を調べたんですけど、手元に資料がなくて、それまで 1 年間かかっていた件数を、わずか数日でその件数を上回ってしまうだけの、LINE への相談が来たと。これがまた 24 時間の全国統一のダイヤルで、子供いじめ相談体制というのが、実はあるんですが、この長野県だけです、LINE 社と契約をして、子供のいじめ自殺対策に関する連携協定というのを、LINE 株式会社と締結して、LINE を活用した取り組みを始めている。この相談がものすごく増えて、自殺予防に寄与していると思われま。

これも是非とも、長野県がやっていることですが、信濃町もこういう窓口を開いて、どういう形で契約していくのかその辺のところは私も分からないのですが、是非とも導入というのを計画の中に盛り込んでいただきたいと思います。特に、長野県では平成 26 年度の数値で、交通事故死亡者の 5 倍以上の 436 人が自殺で亡くなっているということでありま。交通事故死亡者の 5 倍が自殺という、痛ましい結果があります。

そういう、来年度予算案におきましても、若年層に対する啓発、こういうものに重点を置いていただきたいと思います。この啓発事業というのを推進していく必要があると思いま。特にこのゲートキーパーの養成というのが、今後どういうふうにされていくのか、その辺のところの方針もちょっとお聞きしておきたいと思いま。

●議長（小林幸雄） 高橋住民福祉課長。

■住民福祉課長（高橋 徹） ゲートキーパーの養成講座につきましては、自殺の危険を示すサインに気付き、適正な対応をするということで、役割としまして、悩んでいる人に気付き、声を掛け、また話を聞いて必要な支援につなげていく、また見守るといふのが、ゲートキーパーの役割となっております。信濃町では平成 25 年から 2 年に 1 度の割合で、これは消防団員を対象としているのですけれども、実施をしております。お

平成 29 年第 414 回信濃町議会定例会 12 月会議 会議録(2 日目)

むね 80 人ほどの消防団員が受講をされております。今年度も 2 年に 1 度の年となりますので、実施をしていきたいと思っております。また、今年の 9 月なんですけども、町職員、また一般住民の方を対象にしたゲートキーパーの講座を行っております。こちらの方も 20 人ほどの参加者の方がいらっしゃいました。こういったことを、引き続き、続けていきたいと思っております。

●議長（小林幸雄） 湊委員。

◆10 番（湊 喜一） はい。このゲートキーパーというのは、本当、この講座を受けると目からうろここと言うんですか、そういう予兆というのが分かるらしくて、私は受けていませんが、受けた方の話によると、そういう部分があるんだという話をされておりました。是非ともこのゲートキーパーの養成をしっかり進めていっていただきたいと思っております。

あと、学校におけるいじめが起因している、この自殺も、時々テレビのニュースを賑やかすわけですが、非常に心痛む部分があります。信濃小中ではそういうことはないと思うんですが、やはりそういうところ、教員にも、このゲートキーパー養成、是非とも受けていただきたいなと思うんですけれども、いじめの発見、それとそういう部分が本当に見つからない時、そういうゲートキーパー、要するに自殺の予兆というんですか、そういうところを見抜く、そういう講座を是非とも受けていただきたいんですけれども、教育委員会の方針としていかがでしょう、教育長。

●議長（小林幸雄） 竹内教育長。

■教育長（竹内康則） ゲートキーパーの養成を含めて、学校では命というものを大事にするというような教育を中心にして、それぞれの人権週間等で、さらには冬の 1 月、不幸な出来事がありましたので、その月間におきましてですね、節目節目で進めていきたい。当然子供を含めてということですし、先生方それぞれの研修・研究も、その都度お願いをしている、こういう状況でございますので、とりわけゲートキーパー等の受講等についても、教育委員会として学校側をお願いをしていきたいというふうに思っております。

●議長（小林幸雄） 湊議員。

◆10 番（湊 喜一） はい。やはり学校の教師が、子供たちの一番の窓口だと思います。ゲートキーパーの講習を受けているだけで、見方が変わってくると思いますのでね、是非ともお願いしたいと思っております。

あといろいろ資料を用意してきましたんですが、これから奥へ入って行くと、深みにはまってしまって時間が足らなくなりますので、この程度にしておきますが、是非ともこの

平成 29 年第 414 回信濃町議会定例会 12 月会議 会議録(2 日目)

自殺対策、市町村が義務化されたこの自殺対策基本法に対応した各自治体の計画を、信濃町からは自殺される方をゼロにするぐらいの意欲を持って、そういう対策を講じていただいて、更に町民に対して周知徹底する部分を、是非ともお願いいたしまして、私の一般質問を終わりたいと思います。ありがとうございました。

- 議長（小林幸雄） 以上で、湊喜一議員の一般質問を終わります。
この際、3 時 40 分まで、暫時休憩といたします。

(午後 3 時 27 分)